

全学部の教育実習指導を担当して

全学教職センター副センター長 昌子佳広

平成24年度から旧教育学部附属教育実践総合センター専任教員となり、6年目となった。昨年度一年間で全学教職センターへの業務移行を済ませ、本年度から実質的に業務を開始することになったが、私は主に各学部学生の教育実習関連の指導にあたってきた。これまで教育学部学生を対象とする同様の指導に携わってきた経験を活かしながら取り組んできたが、各学部の状況・特性に応じてさらにその内容・方法の改善に取り組む必要があると考えている。それは次年度以降への課題であるが、以下では今年度初めて教育学部以外の各各部の教育実習関連の指導に関わった、その感想を述べておきたい。

教育学部は教員養成を主目的としている学部であるから、全ての在籍学生が卒業時に何らかの教員免許状を取得することとなり、教育実習を行うことは必須である。だが卒業後の進路選択はあくまでも学生本人の意思に基づくもので、教職に就くことを選ばない場合も当然ある。教育実習への取り組みについて言えば、ほとんどの学生は、将来教職を目指すかどうかは別にして、緊張感と熱意をもって意欲的に取り組み、充実した学修期間を過ごすか、ごく一部には、既に教職に就かないことを決め、それ自体は問題ではないが、教職課程の学修全体にも教育実習にも十分な意欲をもって取り組んでいるとは言い難い学生もある。残念ながら4年次の教育実習において特にそれが顕れてしまう。

教育学部以外の学部では教員養成を主目的としていないので、それらの各学部で教職課程科目を履修し、教育実習にも取り組むという場合において、教育学部同様に必ずしも全ての学生が意欲を高く持つ者ばかりではなく、むしろ意欲的な学生は少数ではないかと思っていた。しかし、今年度の指導を通して、その認識は誤っていたことに気づいた。逆に、それらの学部においては少なからず教職への志向をもつ学生が自らの意思で積極的・主体的に教職課程を履修しているのだから、かなり高い意識をもって取り組んでいることが見てとれた。教職への志向をはっきりと持たない者、曖昧な意識のまま教職課程をとっている者は次第に履修を取り止めていき、最終的な教育実習を履修する段階においては、目標を明確に持って、意欲的に取り組もうとする者が残っていくようだ。

事前指導（オリエンテーション）の中で、自分の目指す教師像や、教育実習での目標について書かせてみた。多くの学生が、与えられた欄をいっぱい使って、自らの描く像、目標をしっかりと記述していた。教師のあり方について資料に基づいて思考した結果を話し合い、全員の前で発表したり、教育実習の場をイメージして模擬的に生徒の前で自己紹介をしたりする場面など、自ら積極的に名乗り出て発表しようとする学生が多い。良い意味で予想が覆され、私自身もその時間を楽しむこともできた。

このような姿に触れると、今、教員の仕事は大変に多忙で、学校という職場が「ブラック」視されているとか、教員養成系の学部の志願倍率が下がっているとか、そういう報道にやや暗澹とさせられる気持ちにも、一筋の光が差すように思える。

教育学部の学生たちも含め、彼らの教職に就きたいという願いが叶うよう、さまざまな面でのサポートに取り組んでいきたい。